〈翻　訳〉

トマス・ラヴ・ピーコック

『夢魔御殿』（第四章―第九章）

『がむしゃら館』の著者による　（初版　一八一八年）

赤岩　隆
岩田託子
楚輪松人
栂正行
渡辺美樹
訳

第四章

逃げるマリオネッタ、それを追うスカイスロップの両人の姿は、グロウリー氏によってしかと見届けられていた。そこで氏は、この晩、二人している息子と姪を注意深く、一部始終観察した。両人の態度から氏の引き出した結論は、二人の間には何やら氏の予期していた以上の気持ちのやりとりがあったようだ、というもので、翌日、しっかり機を捉え、スカイスロップから、充分かつ満足のいく説明をしてもらおうと心に決める。そこで朝食を終えると、すぐさ

ま息子の塔に赴き、大真面目なもったいぶった顔つきで、愛想も前置きもなく、こう切り出した。「つまりこういうわけだ。お前は従姉妹のマリオネッタに恋していると」

スカイスロップは、わずかに躊躇らしきものを見せ「仰せの通りです、父上」と答える。

「これまた率直な、他のことはともかくとしても。で、マリオネッタの方もお前を好いているというわけじゃな？」

「そうであったら、と願うばかりです。父上」

「確かめたのか」

「実は、その、まだです」

「だが、そうと願っておる」

「心の底から」

「これは実に腹立たしい、スカイスロップ。がっかりさせてくれるじゃないか。夢魔御殿のスカイスロップ・グロウリーともあろう者が、あらゆる点で、わしやお前と正反対の、ダンスはするわ、恥かしげもなく笑うわ、歌は歌うわの、頭はからっぽ、気はきかないの脳天気娘、マリオネッタなどにのぼせあがるなどとは思ってもみなかったぞ、がっかりさせてくれるじゃないか、ええ、スカイスロップ。マリオネッタが一文無し、体ひとつが持参金の身だということは、充分承知しておろうが？」

「ならば、なおさらのこと、夫たる者にはひとかどの財産も必要でしょう」

「あの娘にとってはそうかもしれん。が、お前にとっては何にもならん。お前の母親は、財産がなかったばかりに、わしが困った折、何の手助けにもならなかった。考えてもみろ、今回の訴訟で、うちの地所がどれだけごっそりと抉り取られたことか。リンカンシャーじゃ、一、二を争っていた大地主のうちがだぞ」

「おっしゃる通り、この海辺では、父上ほど湿地をお持ちの方もいない。でも湿地が恋に何の意味がありましょう？堀や水車がマリオネッタに何の意味があるというのです？」

「しからば、恋は、水車にとって何の意味がある？　一握りの粉にもならんぞ、まったく。しかもだ、わしはもうお前の縁談の相手については腹を決めておる。スカイスロップ、腹を決めておるのだよ。才色兼美、多芸多才、しかも、お前、財産はたっぷりとある。かくも麗しく、思慮深い乙女が、この世にも、この世にある何ものにも、満足しないというめでたい心ばえで暮らしておる。お前のためにわしが用意した、思いもかけぬ嬉しい驚きというものじゃ。わしは、わしの名誉に賭けて――夢魔御殿のグロウリー家の名誉に賭けて――この婚約を執り行うぞ。さあ、スカイスロップ、いかがしたものかな？」

「父上、何とも申せません。この場合、私としては、生まれ落ちた時以来、あらゆる理性的存在に付与されております特権、いわく、行動の自由というものを主張いたします」

「行動の自由とな？　行動の自由などというたわけたものはないわい。我々はみな、盲目にして無情なる宿命という奴の奴隷にして操り人形だ」

「おっしゃる通りです、父上。しかし、個人個人の間における、行動の自由というものは、同一の普遍的宿命から、異なる影響を被る、あるいは、限定を施されることにあるのです。従って、個々の結果というのは同一ではありませんし、また宿命に左右されたそれぞれの意志というものは、衝突を繰り返しては急に方向転換をするというわけです」

「お前の論理は合点がいくものだ。が、お前も気づいておろうが、個人というものは、別の個人に、宿命の様式、あるいは形態を付与する媒介となりうる。それは、多かれ少なかれ、同一性の産出に影響を及ぼそうが。そこでだ、お前、（他の件についてはすべてやりたいようにやっても構わんが）もしこの件について、お前がわしの意に従わぬとい

うのなら、勘当という手段に訴えざるをえん。泣く泣くとは言えな」こう言い終えるや、この父君、息子からの論理の反撃を恐れ、そそくさと塔を後にした。

グロウリー氏は、すぐにヒラリー夫人を探し出し、この一件について自分の考えをぶつけてみた。ヒラリー夫人は、と言えば、マリオネッタのことを、俗な言い回しにあるように、我が子のように好いている、と言う。しかし――こういった場合、常に「しかし」という言葉がつきものだが――財政的な手助けとなると、何ともしようがございません、というのも、私（わたくし）、将来ある二人の息子をかかえておりまして、まだオックスフォードはブレイズンノウズ・コレッジ〔「真鍮鼻学寮」の意　一五〇九年創設のブレイズノウズ・コレッジのもじり〕で学校生活を終えたばかり、知の絆から――大学ということざんす――乳と蜜の流れる地〔『出エジプト記』第三章第八節〕に――ロンドンのウエストエンドということざんす――踊り出ようというそのやさき、一体、誰が自分の将来の取り分の切り詰められることなど、望みましょう、という始末。

ヒラリー夫人は、マリオネッタに、節度、たしなみ、礼節、品位等々*といったものを大切に思うなら、直ちに夢魔御殿を辞すのが賢明、とほのめかした。マリオネッタは黙ってこれを聞いていた。自分が唯一相続したものが、つつましやかな従順さであることを心得えていたからだ。ところが、ヒラリー夫人が出発しようとするのを目にしたスカイスロップが、入ってくるなり、一言も言わず、突然の悲しみに襲われて、足元に跪くと、この若き乙女の方も、黙って悲しみにうち震え、両の腕を彼の首に巻きつけ、よよと泣き崩れるのであった。その後の微妙な光景については、ここに拙い筆を労するより、優しい心根の読者諸氏の、哀れみ深い感受性の想像の赴くところにお任せする方が、はるかに賢明というもの。だが、マリオネッタが、自分は今すぐ夢魔御殿を去らねばならない、ということを匂わすと、スカイスロップ、先祖の頭骸骨を、その収まっている場から摑み取り、マデイラワインをなみなみと注ぎ、父親の前

に姿を現して、マリオネッタ本人の了解なくば、いかなる場合も夢魔御殿を追われることはないと、この場で約束して下さらないとおっしゃるのなら、さあ、この中のものを一気に飲み干してしまいますから、と迫るのであった。マデイラワインを何か毒物と取り違えたグロウリー氏は、鬱々と狼狽し、求められた約束に言質を与える。スカイスロップは、嬉々としてマリオネッタのところに戻り、マデイラワインで喉を潤したのである。

グロウリー氏は、ロンドン滞在中、友人ツーバッド氏との間で、スカイスロップとツーバッド氏の娘との縁談を、誠にめでたい望ましいこと、と話をつけていた。氏の娘は、ドイツ修道院で教育を終えているところだが、父親が言うには、アフリマンの哲学**の奥義に深く感銘し、グロウリー氏が、夢魔御殿の未来の女主人にと望むに充分、おしなべて陰鬱で反喜劇的な娘である。この娘には、自分の自由になる、かなりの財産があった。すでに見たように、グロウリー氏が、この娘を息子の将来の嫁に、と意を決するにあたっては、その重みが作用していなかったと言えば嘘に

*原注――著者はこれらと同意の語彙すべてを完全に理解する者ではない。どんなものであれ女流文学者のしたためられた小説を御縦覧あれ。

**原注――アフリマンは、ペルシャ神話の邪悪な力、闇の王国の君である。彼は光の王国の君、アフラマズダの主敵となっている。これら二つの力が、それぞれ相等しい勢力を持つ。時として、これら一方のいずれかが、一時的な主権を持つ。――ツーバッド氏によれば、現在はアフリマンの支配期ということになろう。バイロン卿もアフリマンを『マンフレッド』の中で使用しているところから、同意見のように思われる。その作品の中で、ペルシャのアラスター、Καχης Δαιμων〔邪悪なる神主〕は、ギリシャのネメシス〔人間の思い上がりを憤り罰するギリシャの女神〕たちより、また運命の三女神と呼ばれる、スカンジナビアのヴァルキューレの三人の巫女たちからも、この世の君と歓呼されている。中世の錬金術師たちの占星術上の使い魔、デンマークからアルプスに移された土・気・火・水の四元素を呼び起こす魔女、そして魂を求めて最終幕に登場するファウスト博士の悪魔たちのコーラス、この異種混合の神話的一団が、『カンディード』の六人の王たちのように、食事のテーブルを別にすれば、どこで最初に出会ったのか想起するのは困難なことである。

なろう。というわけで、グロウリー氏、スカイスロップのマリオネッタへの厄介な執着に、大いに狼狽させられた。グロウリー氏は、この件に対して、ツーバッド氏に悔やみを述べた。するとツーバッド氏、自分はこれまで、あらゆる事柄において、悪魔に邪魔されることには慣れているから、その割れたひづめによる新たな傷痕にいまさら驚くにはあたらない、が、今度ばかりは、奴を出し抜いてやりたい。というのも、この世は悪の大劇場であって、真面目さと厳格さは知恵を特徴づけるもの、笑いと歓楽は人間をヒヒ同然にしてしまうもの、という事実が正しくわかっている人間には、自分の娘とマリオネッタの比較など、まったくもって想像するだにおぞましいと確信しているからだ、と言った。グロウリー氏は、この問題に関してはツーバッド氏の意見をもって自らを慰め、早くドイツから戻るように娘さんに言ってやって下さい、と促した。ツーバッド氏はこれに答えて、私も毎日、毎日、あれのロンドン到着を待っている次第、今すぐにでも迎えに行きたいところ、そうすれば時を移さず、あれを、ここ夢魔御殿に連れて来ますからな、と言った。「その時こそ、我々は、タレイア〔喜劇を司る女神〕とメルポメネー〔悲劇を司る女神〕のいずれかが――アレグラ〔快活の人〕とペンセローザ〔沈黙の人〕のいずれかが――勝利をさらうことになるのか見きわめることができましょう」

「いかにも」とグロウリー氏。「秤がどちらに傾くか、あるいはスカイスロップの奴が、まこと我がグロウリー家の尊き幹から生え出た若枝であるかどうか、わかろうというもの」

第五章

マリオネッタは、スカイスロップの心を摑かんでいるものと確信していた。彼女は、自分を取り巻くさまざまな困

難にもかかわらず、我が恋人を苦しませる、という喜びに耽るのを抑えきれず、スカイスロップを四六時中、熱でうなされっぱなしにする。時には、無上の愛をもって彼に接するかとおもえば、時には、冷やかな無関心を装ってそっぽを向くこともあった。わざと冷たくして怒らせたり――優しい言葉でメロメロにしたり――リストレス閣下といちゃついては、嫉妬の炎を燃え上がらせる。マリオネッタの魔力に魅せられた閣下の方はと言えば、マッヨイグサのように、俄然生気を帯びた様子。またある時には、マリオネッタ、ピアノの横に腰かけ、スカイスロップの哀れな諫言の文句に、適当に注意を払って、耳を傾けるなどということもあった。しかし、彼のその雄弁術が最も情のこもったくだりになると、アレグロの〔急速な〕ロンドなどを奏で、「ねえ、素敵でしょ？」などと言っては、彼の思いのすべてを混乱に変えてしまう。そして、スカイスロップが荒れ出すと、こう言って応えるのだ。

「しっし、しっし、そーっと、そーっと
騒ぎを起こすのはやめましょう」
〔ロッシーニ『セヴィリアの理髪師』第二幕〕

あるいは、似たような冗談で。するとスカイスロップは、マリオネッタのもとを足早に去り、塔に引き籠って、動揺のあまり悶々としながら、もうあんな娘と付き合うものか、女なんか金輪際、と誓う。だが、それも束の間、来てちょうだい、という短い手紙にまたぞろ戻ってくる始末。後悔と改心の約束を流々と書き記した手紙を出し惜しむマリオネッタではなかったのだ。世界を再生し、「七つの金の燭台」〔自分の論文の購入者〕を探し出すというスカイスロップの計画は、こう、熱にやられた精神状態では、遅々として一向に進まず、の状態であった。

数日間というもの、事態はそんな具合に進んでいた。グロウリー氏は、ツーバッド氏から何の知らせもなく、そわそわし始めていた。そんなある晩のこと、件の人が慌てふためき、家族や客の溜まり場になっている書斎に飛び込んで来た。「悪魔、大なる憤志を懐きて汝等のもとに下りたればなり」と大声で怒鳴りながら。グロウリー氏はツーバッド氏を別室に誘い、しばらくそこにいた後、二人は、実にうろたえた面持ちで書斎に戻って来た。が、その狼狽振りの原因についてはどうしても説明しようとはしなかった。

翌朝早く、ツーバッド氏は夢魔御殿を出発した。グロウリー氏は、一日中、溜め息をついたり、唸っていたりはしたものの、誰にも声はかけなかった。スカイスロップは、いつものように、マリオネッタと口論の挙句、病的な感受性の発作に襲われ、塔に籠っている。マリオネッタは、気分を紛らわそうと『恋に狂ったニーナ』〔パイジェッロ（一七四一――一八一六）作のオペラ〕のアリアを歌っては、ピアノを奏でている。リストレス閣下は、本を片手に、ちらりちらりと中身を覗き込みながら、ソファーの上にあおむけになって、その調べに耳を傾けている。ラリンクス師はソファーに近寄り、どうです一勝負、とビリヤードに誘う。

リストレス閣下――ビリヤードですと、これはまた光栄なお誘い。喜んで、と言いたいところですが、御覧のように疲れ切ったこの有り様。お手合わせは荷が勝ち過ぎます。体がついていったのは、一体、いつのことやら。（閣下はベルを鳴らし従者を呼ぶ。フェトゥー登場）フェトゥーや、最後にビリヤードをやったのは、いつのことだったっけかね？

フェトゥー――昨年の一二月一四日でございます。旦那様。（フェトゥー、お辞儀をして退場）

リストレス閣下――そうでした。七か月前のこと。そういうわけなんです。ラリンクス先生。そういうわけなんです

よ。私の神経は、オーキャロルさま、私の神経はボロボロなんです。バース〔イングランドの南西部、浴場などのローマ時代の遺跡があり、湯治場もあることから、一八世紀には流行の社交場でもあった地〕に行くように薦められています。仲間の中には、チェルトナム〔イングランドの西部、競馬場や鉱泉で知られる地〕を薦める者もおります。両方行ってみるつもりです。社交の季節がぶつからなければですが。社交期ですよ、ラリンクス先生。社交期です、オーキャロルさま。社交期が何より大切。

マリオネッタ――健康もまた大切なもの。そうですわね、ラリンクス先生。

ラリンクス師――その通りです。オーキャロルさん。と申すのも、理に長けた方々が、最高善について、どんなに意見を異にしましょうとも、素晴らしき晩餐こそ、きわめて良き物だということを、一体、誰が否定いたしましょう？また、食欲なくして良き晩餐など、一体、何の意味がありましょう？　その食欲は健康からでなくして、一体、どこから来るというのです？　ところで、リストレスさま、チェルトナムと言えば、旺盛な食欲を満たすことで有名なところです。

リストレス閣下――こんな素晴らしく筋の通った論理は、ついぞ聞いたことがありません、ラリンクス先生。最良の論理であることは請け合いです。チェルトナムのことは、とても真剣に考えました。とても真剣かつ深遠にね。ええ、考えましたとも――ええと――いつ考えてたんでしたっけ？（再びベルを鳴らす。フェトゥー再登場）フェトゥーや、チェルトナムに行ったものか、行かぬものか考えたのはいつのことだったっけ？

フェトゥー――去年の夏、七月二一日のことです。旦那様。（フェトゥー退場）

リストレス閣下――そうでした。実に便利な男でして、ラリンクス先生――実に便利なね、オーキャロルさま。

マリオネッタ――確かにそのようにお見受けいたしました。お付きの方は、閣下の行動のみならず、考えについても

歩く記憶力、生きた年代記の役割を果たしておいでのようですわね。
リストレス閣下――これはまた素晴らしい定義、オーキャロルさま。実に素晴らしいですぞ、名誉に賭けて。はっ、はっ、はっ。やれやれ、笑いは実に愉快なもの、が、私には荷が勝ち過ぎます。

リストレス氏の許に荷物が届けられた。急ぎの便で送られたものだ。荷を解くためフェトゥーが呼ばれた。中身は、一篇の真新しい小説と一篇の真新しい詩と判明した。ともに新しもの好きの社交界の読者たちが、こぞって、今か今かと心待ちにしていたもの。そしてもう一つ、人気雑誌の最新号。その編集者と助手たちというのが、宮延でも覚えめでたく、教会と国家へのその奉仕に対し、充分な恩給*を享受していた。フェトゥーと入れ代わりにフロスキー氏登場。氏はこの文学の送り物を興味深げに品定めする。

フロスキー氏――（頁をめくりながら）『小説　悪魔男（デヴィルマン）』〔ウィリアム・ゴドウィンの『マンデヴィル』（一八一七）のもじり〕ふーむ。憎悪――復讐――人間嫌い――そして聖書からの引用。ふむ、これは黒胆汁の病理解剖だ。『詩　ポール・ジョーンズ』〔ポール・ジョーンズ（一七四七―九二）は、スコットランド生まれのアメリカ人私掠船船長で、アメリカ独立戦争中、イギリス沿岸を荒らし、イギリスでは海賊と見なされた〕ふむ、これは中身が知れてるな。ポール・ジョーンズ、気のいい熱血漢――恋に破れ――倦怠と太っ腹から海賊となり――幾多の男どもの首を掻き切り、幾多の女たちの心を虜にする――最期は桁端に宙ぶらりん。破局は、ひどくぎごちない、しかもまったく詩心にも乏しい。――『ダウニング街レヴュー』ふむ、巻頭の記事は、「郷氏ロデリック・サックバットによる『赤表紙　貴紳録に捧げる頌歌』か。ふむ、自作の詩を自分で論じているんだな、これは。〔「ロデリック・サックバット」とはロバー

ト・サウジーのこと。「ロデリック」はサウジーの詩『ロデリック　最後のゴート族』へ、そして「サックバット」は、桂冠詩人として彼の毎年の俸給、サック（スペイン産のシェリーやカナリー諸島産の白ぶどう酒）の大酒樽（バット）への言及。桂冠詩人として、彼の名前は赤表紙（貴族と紳士の人名を載せた、十九世紀英国の赤い表紙の貴紳録）に皇族の一員として記載されていた。〕

（フロスキー氏はさらに『ダウニング街レヴュー』の他の記事に黙って目を通した。マリオネッタは小説を、リストレス氏は詩を、それぞれ見る）

ラリンクス師――社交界の寵児、名門のお若い紳士殿の割りには、リストレスさま、あなたは大変な篤学の性向をお持ちとお見受けしましたが。

リストレス閣下――篤学ですって！冗談がお好きでいらっしゃる。ラリンクス先生、私が篤学だなどという憶測は、どうぞなさらないでいただきたいものです。確かに教育は大学で終えましたが、読んでおかねばならない今風の本というものは、何冊かありましょう。当世の話の種ですからね。それ以外は、ラリンクス先生、言わせていただければ、あなたの方がよほど本の虫でしょう。

ラリンクス師――とんでもない。私は、自分がいたって本の虫、などとは決して申せません。しかし、全然、読まないとも言えませんがね。時折、膝の上に針仕事を抱えている御婦人方に、物語や詩の一つ、二つなどをお聞かせすることが、音声エネルギーの異端的使用とは思えませんからね。自己弁護として言わせていただくなら、私ほど、その

＊原注――「恩給　祖国への大逆に対して国家の奴隷に与えられる報酬」。訳注――ジョンソン博士の『英語大辞典』〔「国家の奴隷」とあるのは「国家の雇い人」の誤り。

ような折、冒険の持つ危機意識の織り混ざった、また悲劇の哀調を高めるような、問いと答えを永遠に繰り返す、ヨブの如き忍耐を持ち合わせている者はそれほど多くはおりますまい。

リストレス閣下――そして、しばしば著者が書いてもいないのに、哀調をかもし出したりなさる。

マリオネッタ――いつか雨降りの朝にでも、先生の忍耐を試してみとうございますわ。リストレスさまに、誰もが読むような最新の御本を紹介していただきましょう。

リストレス閣下――お届けしましょう。新しいピカピカの光沢のあるものを。ふくよかなうぶ毛にくるまれ、食べ頃には、実をほころばすまでに熟した、西洋スモモのように新鮮なやつを。エディンバラから郵便馬車で運ばれ、ロンドンから急行便で転送されたものです。

フロスキー氏――この新奇さへの熱狂は、文学には破滅の素ですぞ。私と私の親友の作品を別にすれば、良い物など、せめてジェレミー・テイラー〔英国の主教、チャールズ一世付きの牧師で説教家・著述家（一六一三―六七）〕まで遡らないと何一つありません。で、ここだけの話ですが、私の友人たちの著作の最良部分は、私が書いたものか、私の示唆を受けて書かれたものなのです。〔フロスキー氏のモデル、コールリッジのワーズワスとの『抒情歌謡集』、そしてサウジーとの『オムニアーナ』、それぞれの共同執筆へのほのめかし〕

リストレス閣下――あなたには敬意を表します。しかし、私にしてみれば、当世の書物は、私の感情にとって大変な慰めで、また性にもあっております。それらの中には、言わば、楽しき北東の風、知性の葉枯れ病が息づいているのです。心地良き人間嫌いと不満、それが美徳と活力の空しさを示し、私と私のソファーとを上幾嫌にしてくれるわけです。

フロスキー氏――いかにも、当世の文学は北東の風――人の魂にとって葉枯れ病。私自身も文学をそうするのに一役

かっているものと自負しております。良い実を生み出す方法は花を枯らすこと。これを逆説と言われるかもしれません。まったく、そうあってほしいものです。考えてもご覧なさい。

会話は、泥だらけのツーバッド氏が再び現れて、中断した。氏は、ドアの所に姿を現し、「悪魔、汝等のもとに下りたればなり」と言うと、再び姿を消した。夢魔御殿と下界を結ぶ道は、盛り土によって湿地より一段高くされていて「リンカンシャー、ケンブリッジシャーの低湿地の中に土を盛り上げて作った土手道 causeway のこと」、見渡す限りまっすぐに湿地を貫いている。両脇には水路があり、水が流れているが、表面を覆う水草で目には見えない。この水路の一つに、水車に脅えて後ずさりした馬が、ツーバッド氏の馬車をまっさかさまに突き落としてしまったのだ。氏は、悲惨な苦境にあって、余儀無く窓から這い出でなければならないという始末。見ると車輪の一つが壊れている。ツーバッド氏は、馬車を洗車と修理にクレイダイクに何とか持って行ってみます、と言う御者を残し、旅行用トランクを持った召使を従えて戻って来たのだ。道々、お気に入りの『ヨハネ黙示録』を繰り返しながら。

第六章

ツーバッド氏は、娘のセリンダとロンドンでおちあったが、その喜びの興奮もひとまず収まると、娘にあてがう婿殿が用意してある旨知らせた。若き乙女は、勝手ながら生涯の伴侶は自分で選ばせていただきとうございます、と真剣な面持ちで応える。自分の計画には、すべて悪魔の邪魔が入る運命だわい、とぼやきつつもツーバッド氏、自分としては、魔王ルシファーに抵抗もせずに、素直に従うなどという罪はよもや犯すまい、よってセリンダは、自分が選

んだ人物と結婚させてみせよう、と良心に賭けて決意した。ツーバッド嬢は、そうするつもりは毛頭ございません、と落ち着き払って応える。「セリンダ、セリンダ」とツーバッド氏。「絶対にそうさせてみせるぞ」「いいえ、お父さま。私には自分の自由になる財産がありますでしょう」とセリンダ。「それだけになお厄介なのだ」とツーバッド氏。「だが、手立ては見つかるよ。お前、手立てはな。頑固娘をてなづけるのに、何も手立てが一つだけというわけではあるまい」両人は、正反対の決意を露にし、その夜は別れた。朝になってみると、令嬢の部屋はもぬけの殻、一体娘がどうしたのか、ツーバッド氏には想像もつかない。街も、田舎も、隈なく探し回り、その合い間に、夢魔御殿にちょくちょく顔を出し、友人グロウリー氏と相談した。これは娘としてあるまじき反抗と反逆の事態だ、とグロウリー氏はツーバッド氏に同意する。またツーバッド氏は、この逃亡者を見つけ出した折には、「悪魔、大なる憤志を懐きて彼女のもとに下りたる」ことを見せつけてやろうと息まいた。

夕刻には一同、いつもの通り、書斎に集まっていた。マリオネッタは、ハープの前に座る。リストレス閣下は、彼女の傍らに座り、楽譜をめくる。これだけでも閣下には荷が勝ち過ぎていたけれども。ラリンクス師は、時折、閣下に代わって、この嬉しき代役を務める。スカイスロップは、部屋の片隅で、唇と爪を噛みしめながら、嫉妬という悪魔に苛まれている。マリオネッタは、挑発的なまでに上機嫌な微笑みを浮かべ、時折、ちらりちらりと彼の方を盗み見る。スカイスロップは、それを見て見ぬふりをするけれども、ただでさえ掻き乱れた心はそれだけ一層苛立つばかり。そこでダンテの一巻を取り出すと、煉獄篇に没頭しているふりをするが、もっとも、何を読んでいるか一言半句だに解してないし、それはマリオネッタも充分承知していた。彼女は、足取りも軽やかに近づいて来ると、スカイスロップの読んでいる本を覗き込みながら言った。「煉獄の途中ですのね」「ああ、地獄のど真ん中さ」スカイスロップは猛然と言う。「そうですの」と彼女。「それでは、こちらにいらっしゃいませ。ドン・ジョバンニのフィナーレ〔ド

ン・ジョバンニが悪魔たちに地獄に連れ去られて行く場面〕を歌ってさしあげますわ」

「ほっといてくれ」とスカイスロップ。マリオネッタ、今度は、すまなさそうな微笑みを浮かべ、彼を見つめながら曰く。「可笑しな、おこりん坊さんですこと」「ほっといてくれ」とスカイスロップ。しかし前ほどの力はなく、また、言葉どおりにとられることも決して望んではいない。マリオネッタは、すぐさまスカイスロップのもとを離れ、ハープに戻ると、聞こえよがしに言う。「リストレスさま、ダンテをお読みになったことはおありですか。スカイスロップさまは、ダンテを読んでおられて、丁度、今、煉獄ですって」「そして、私は」とリストレス閣下。「ダンテを読んではおりませんが、今の気分は、天国ですな」とマリオネッタにお辞儀する。

マリオネッタ――また、大変慇懃でいらっしゃいますこと、リストレスさま。さぞかしダンテをお読みになるのはお好きなのでしょうね。

リストレス閣下――どういうものか、最近までダンテは存じませんでした。私の蔵書にはなかったものですから。たとえあったにせよ、読んではいなかったのでしょうね。が、この頃は流行っているようなので〔一八一四年、H・F・ケアリーが、広く流布することとなった『神曲』の翻訳を完了した〕、そのうち、雨の朝にでも、読まなくてはなりません。

マリオネッタ――あら、夕べにでも、是非ともお読みになればよろしゅうございましょうに。リストレスさまは、恋をなされたことはおありですか？

リストレス閣下――誓ってありませんとも、オーキャロルさま。夢魔御殿に参るまでは。恐れながら、恋は好ましいものとか。ですが、心煩わすことが多そうで私には荷が勝ち過ぎるのでは、と心配しておるわけで。

マリオネッタ――それでは、私が御手を煩わせない、手っ取り早い求愛の術をお教えいたしましょうか？

リストレス閣下――これはまた有り難き幸せ。お教えいただきたくて、うずうずします。

マリオネッタ――意中の方に背を向けて、ダンテをお読みあそばせ。ただし、いきなり途中から読み始められませ。一度に、三、四頁はおめくりあそばせ。先に進むだけでなく、たまに後ろに戻ったりしながらね。そうすれば御婦人は、閣下が自分のことを、死ぬほど恋焦がれているのだとすぐお気づきになられますわ。

（リストレス閣下は、スカイスロップとマリオネッタの間に座っており、この麗しき語り手にその注意の一切を奪われていたので、この話題の張本人、スカイスロップには一向に気づいていなかった。）

リストレス閣下――オーキャロルさまは、また戯れていらっしゃる。それでは町一番の野暮天と決めつけられるのが落ちでしょう。

マリオネッタ――いえいえ、恐らく、変わった愛情表現もあるものだと申されるでしょう。

リストレス閣下――お言葉を返すようですが、私としては……

フロスキー氏――（部屋の向い側から会話に割り込んできて）リストレス君はダンテが流行（はや）っていると申されたかな。

リストレス閣下――はい、確かにそう申しました。フロスキーさんほどの学識のあるお方の前で、小生のような浅学非才の者がそのような話題、おこがましい限りですが。ダンテの悪魔が何色なのか存じませんが、確かに流行っているところを見ますと、青ではないかと思います。小生には、フロスキーさん、「青い悪魔〔憂鬱〕」こそ、流行（はやり）文学の根底をなす特徴であるように思えるのです。

フロスキー氏――確かに青は、重要商品ですな。でも、必ずしも青だけにお呼びがかかるわけではないところをみると、黒も赤も灰色も代役として認められるでしょう。お茶（ティー）や、遅い晩餐〔ピーコックの存命中、晩餐の時刻は、午後

の早い時刻から夕方に徐々に移行した〕、フランス大革命も悪魔と組んだような大騒ぎを引き起こし、リストレス君、悪魔を活動させたのですよ。

ツーバッド氏――（跳び上がって）大なる憤志を懐きて……

フロスキー氏――言葉遊びではありませんぞ。ありのままの悲しい、紛れもない事実ですぞ。

リストレス閣下――お茶と遅い晩餐とフランス大革命。この関係が小生には分かりかねますが。

フロスキー氏――お分かりいただけたなら、それこそ無念でしょう。自分の観念の関連を把握しているような輩を、私は憐れに思います。ですが、他の人間に、観念の関連を一切、見破られてしまうような人間は、もっと憐れですな。恐れながら、由々しき悪は、現代の道徳的及び政治的文学に、あまりに多くの陳腐な光が存在するということ、つまり一般大衆に理解しうる程、明白だということにあるのです。光は神秘の大敵であり、そして神秘は情熱の大の味方なのです。抽象的真実への情熱は、その情熱の対象である真実が、人間の能力がまったく及ばぬ程、抽象的である限りにおいて、極めて素晴らしきものなのです。そしてその意味では、私自身、真実への情熱を持ち合わせていますが、他の意味ではそうはありません。というのも形而上学的な探究の喜びは、その過程にあるのであって、到達点にあるのではないからです。仮にも到達してしまえば、過程で味わう喜びは、もはや失せてしまうことでしょう。精神は、その健全さを保つためには、絶えず活動させておかねばなりません。精神に相応しい活動とは、緻密な理論を構築することです。分析的な理論構築は、卑しい、機械的な過程を経るばかりで、素材である知識を、一片ずつ、ばらばらに解体し、調べ上げ、そこから事実と呼ばれる堅固で頑強な二、三のしろものを抽出するだけなのです。そんなものは、絶対に願い下げです。他方、統合的な理論構築は、その目標として、代数の虚数のような、何か到達不可能な某かの抽象概念を設定し、証明不可能な命題を二つばかり、当然のこととして受け入れることから始めます。この仮定

された二つの真実を組み合わせて一つにし、更に第三の命題を生み出し、そしてその操作を果てしなく繰り返し、人間の知性に測りしれない恩恵をもたらすのです。この過程の美しさと言えば、この過程、それぞれの段階で分岐し始めるのですが、その均衡のとれた枝分かれに美が存在するのです。ですから道を見失うことは必定ですが、限りなき探究に際限なく関わり続けることで、精神を確実に完璧な状態に保つことができるのです。こういうわけで、私は、長男を、エマニュエル・カント・フロスキーと命名したのです。〔「その頃、ハートリの『人間論』には心から驚嘆していたので、私は長男に彼の名をつけた。」コールリッジ『文学的自伝』第十章〕

ラリンクス師――こんな啓蒙的な話は初耳ですな。

リストレス閣下――一体、今のお話、ダンテと青い悪魔とは、どういう関係があるのですか。

ヒラリー氏――ダンテとは大して関係はなさそうですが、青い悪魔とは大いに関係がありそうですな。

フロスキー氏――現代の文学が夢魔に取り憑かれていることは、きわめて確かであり、またそれは、きわめて喜ばしいことです。お茶のせいで我々の神経はずたずたになり、また、遅い晩餐は我々を消化不良の奴隷にしています。またフランス大革命も、哲学と聞いただけで我々の身をすくませ、洗練された人々の（かく言う私もその一人ですが）政治的自由を求める情熱も、それで挫けてしまったのです。小説の如き軽食を好むが故に、理論という食べごたえのある食事を排する類の「読者大衆」〔コールリッジの頻繁に使用する語で、彼の造語とみなされている〕は、その堕落した想像力の口蓋に激辛のソースを絶えず与えられんことを求めています。彼らは幽霊や悪鬼や骸骨を喰らって生きているのであり（私と私の友人のサックバット〔サウジーのこと〕君とは、そのうち最上のものを供していますが）、終には悪魔自身でさえ、聖山アトス〔ギリシャ北東部カルキディキ半島の山で、聖母に祝福された山として、今も中世以来の伝統を守るギリシア正教修道士たちの信抑の拠りどころである〕ほどにも拡大されたものの、飽食しきった

口には、あまりに「けちで、平凡で、普通の」〔『ヘンリー五世』第四暮第一場第三八行〕ものになってしまったのです。というわけで、幽霊たちは霊界に戻され、悪魔は外の暗闇〔マタイ伝第八章第十二節、第二二章第十三節、第二五章第三十節〕に放り込まれました。そして今や我々の精神の喜びは、英雄的行為や頓挫した慈悲心という仮装に粉飾を凝らして、人間性に潜む悪徳や邪悪な情熱に、思いを巡らすことになってしまったのです。その秘訣とは、実際、我々の経験と矛盾する観念を組み合わせ、ある種の美徳を、この世では絶対に身につけることなどできっこない、およそ的はずれも甚だしい、まさにそんな人物に、その美徳の「深紅のつぎ布」〔文章にまじる美文調をいう。ホラティウス『詩学』十五―十六〕を纏わせることなのです。そうすることで、その美徳一つで、その人物に顕在する悪徳の一切を免責するのみならず、もろもろの悪徳も、その美徳には必要なおまけ、欠くことのできない付属物、今述べた美徳の特質をなすものだ、と言いくるめられるのです。

ツーバッド氏――それは「悪魔（あくま）、我等（われら）のもとに下（くだ）りたればなり」だからで、我々の正邪の判断を狂わせた方が得策だとふんだからです。

マリオネッタ――おっしゃること、正直申して、よく分かりかねますわ、フロスキーさま。もう少し、私にも分かりやすく話して下されば嬉しゅうございますのに。

フロスキー氏――それでは、一、二の例を挙げれば充分でしょうな。オーキャロルさん。私が、金貸しのユダヤ人の持つ、さもしい、浅ましい性質を取り上げて、鋲で留めるように、それらに最高の慈悲の心を縫い付けるならば、昨今の小説にうってつけの主人公を創りあげることになるでしょう。それで、黄金の葉にくるまれて、良薬として投与される蜘蛛のように、ごくわずかの不自然な美徳の下に、隠れた巨悪を投与する当世風の方法に、私の持ち分を貢献することになるでしょう。また同じ原理で、もしある男が私にいきなり襲いかかって、力まかせに、財布や時計を奪

うようなことがあれば、その者を利用し、威勢のいい若者として、悲劇の人物に飾りたてるでしょう。ロマンティックな雅量から廃嫡され、世間一般に対して、特に、祖国に対して微笑ましい敵愾心で一杯であり、また啓蒙的で騎士道的愛情の身についた人物としてです。そこに、彼と恋に落ちる野育ちの娘を加え、幾多の冒険をさせ、次々と十戒を、全部破らせればいいのです。（勿論、破るのも崇高な動機のためであることを、筋の展開の中で充分に説明しなければなりません。）そうすれば、純文学の新しい領域に誕生したどんな悲劇的な登場人物にも劣らない、愛すべき一組の男女を生み出すことができるのです。もっとも、私に言わせれば、純文学とは、黒胆汁の病的な分析に他ならないし、それはまた、精神の力を発揮するために素晴らしい領域を提供するものとして、大いに賞賛され喜ばれているのです。

ヒラリー氏――いら草を楡の木の大きさにまで育てようと温室を利用するよりはましですな。まあ、こういう風に進んでいけば、新しい詩も生まれることでしょう。第一の鉄則の一つが、「この世には太陽の光や音楽が存在したことを忘れることを忘れる勿れ」、といったところでしょうかな。

リストレス閣下――目下の我々みたいなものですな。さもなくば、こんな退屈な話でオーキャロルさまの音楽を中断――させてはいなかったでしょうに。

フロスキー氏――音楽も太陽の光も、まだ存在することを、オーキャロルさんが我々に思い出させてくださるならば、それは喜ばしい限りです。

リストレス閣下――それも佳人の声と微笑でね。では、お許しを願って（と楽譜をめくる）。

一同、耳を傾けるなかで、マリオネッタは歌う

陰鬱な修道士様　虚ろなお顔はなぜ？
物思うお顔はなぜ？
昔より　蒼褪めて　おやつれよ
陰鬱な修道士様
教えて　憂鬱は　なぜ？

ふっくらと　輝いてた
丸い丸い赤ら顔
心優しいお気持ちの
外に見えたおしるしが
教えて　変わったのは　なぜ？

陰鬱な修道士様　教えましょう
私にはわかります
陰鬱な修道士様　物思うお顔は
私に対する愛のため
私に対する愛のため

誓わないで　陰鬱な修道士様
　ああ　どうか
修道士様には　ふさわしくない
　死すべき乙女への愛は
　　お受けできない

乱れる心　わかってください
　蒼白い　しかめ面で黙られて
でも　乙女は愛するのです
　頭巾を　かぶってはいても
　　梟よりも雲雀のほうを

たちまち、スカイスロップはダンテを棚に戻し、歌う美しき乙女を取り巻く輪に加わった。マリオネッタは仲直りの微笑みを浮かべ、スカイスロップも充分に満足した。そして、その夜、二人は睦まじきことこの上なく過ごした。リストレス閣下は、てきぱきと楽譜をめくりながら言う。「病める者には厳しいのですね、オーキャロルさま。ご非難を避けるためにも、私は元気爽快にしておらねばなりませんな。とは言っても、私には荷が勝ち過ぎますが」

第七章

新たな訪問者が夢魔御殿に到着した。魚類学者〔ヒトデ属〕アステリアス氏である。この紳士、七つの海を股にかけ、深海の生ける驚異を探究してその一生を過ごしてきた。戸棚には、貝殻、海草、珊瑚類の剝製や乾燥させたのやらが一杯で、王立協会〔一六六〇年に創設された英国最古の自然科学振興を目的とする学会〕の賞賛と羨望の的となっている。〔墨色ダコ〕セピア・オクトパス海の水底の洞穴にも潜ったことがあり、その海に棲む海ガメ夫婦の仲睦まじい幸せな夫婦生活を掻き乱し、血みどろの格闘の結果、勝ち誇って浮かび上がってきたこともあった。熱帯の海では、凪で足止めを喰らった時など、巨大ダコが水面から顔を出し、その足をマストや索具に絡ませるのを見とどけよう、と見張ったこともあったのだが、残念なことに、その期待空しく、報われることは決してなかった。〔これら生物の詳細に関して、ピーコックは、後に言及するデニス・モンフォールの『モリュスクの博物誌』（パリ、一八一一）を参照している〕万物の起源は海にあり、タコこそすべての生物の最初のもので、その丸い身体と長く突き出た足から、ヒンズー教徒たちは、彼らの最古の神を型どったのだ、と主張していた。しかし、彼の野心の最大の目標、調査の最終目標というのが、トリトン〔頭と胴は人、下半身は魚で、海豚（いるか）に乗ってほら貝を吹き鳴らす半神〕、そして人魚を発見することであった。それらの存在を、彼は内心、絶対的に強く信じて疑わず、確認された事実、及びもっともらしい仮定の両方から引き出された論議により、「演繹的に」、「帰納的に」、あるいは「一層有力な論拠をもって」、また、統合的かつ分析的に、はたまた、三段論法的かつ誘導的に、実証する用意は万端整っていた。そして、今や、以前よりの約束ではあったのだが、延ばし延ばしにしてきた訪問をするため、ロンドンから大急ぎで、旧知の仲のグロウリー氏のもとへと駆けつけたのも、リンカンシャーの海岸で、人魚が「その柔らかい悩ましい髪の毛を梳いている」

〔ミルトンの仮面劇『コウマス』第八八二行〕のを見たという報告があったためであった。

アステリアス氏には御令息がお供していた。氏は、その名を〔水瓶座〕アクエリアスと命名したのだが――やがては、魚類学会の居並ぶきら星連中の中でも、一層輝く星座とならんことを期待して、一人悦に入っての命名であった。如何なる慈悲深き御婦人が、この令息を御懐妊あそばされたものか、誰にもわからなかった。まして、氏が、アクエリアス君の母君について仄めかしたりすることなど、一度もなかったので、母親は人魚に相違なく、科学的徹底調査と称して、いつも海岸べりをうろついているのは、人魚と、よりを戻そうという、およそ非哲学的な魂胆からに相違ない、と噂するロンドンのひょうきん者さえいたくらいであった。

アステリアス氏は、数日間にわたり、海岸を徹底的に調査した。その収穫はと言えば、失望であったが、決して、絶望ではなかった。ある夜、御殿に到着してほどなく、書斎の窓べに腰をおろして海を眺めていると、その注意、寄せ来る波際近く、人影の動くのに引きつけられた。月明かりのない夏の闇夜に、それはぼんやりと見える。その動きは不規則で、何かしら、ためらっているかのよう。長い長い髪の毛を風になびかせている。何であれ、漁師であるはずはない。婦人のようだが、ヒラリー夫人でも、オーキャロル嬢でもない。当の二人は書斎にいるのだから。ひょっとして、女の召使かもしれぬ。しかし、それにしては、あまりに優美すぎる。あまりに印象的な着こなしだ。それに女の召使の一人だとしても、こんな時間に、あんなところで。見たところ、はっきりした目的もなく、右往左往して、一体、何をしようとしているというのか。旅人のはずもない。隣村のクレイダイクからでさえ、十マイルも離れているのだから。一体、何処の女が、夢魔御殿の壁下の波打ち際をうろつくためにだけ、湿地を越えて十マイルもやって来るものか。人魚ではなかったのだろうか。もしかしたら、人魚だったのかもしれない。多分、人魚だったのだ。いや、人魚以外にはありえない。絶対に人魚だったのだ。アステリアス氏は、口に手をあて、爪先だって書斎を抜け出

しながら、アクエリアス君に後について来い、と手招きした。

室内の他の者たちは、アステリアス氏の振舞いに大いに驚き、その謎を解けはしまいかと、窓辺に近よる者もいる。ほどなく、氏とアクエリアス君が、堀の反対側を慎重に忍び足で歩いているのが認められた。しかし、目に入ったのは、ただそれだけ。戻ってくると、アステリアス氏、一同の者に向かって非常に悔しそうな調子で言った。人魚の姿を、かい間見たことは見たのだが、闇の中に見失ってしまった。きっと、今頃、海底の岩屋で恋人のトリトンと食事でもしているのだろう。

「しかし、アステリアスさん」とリストレス閣下。「あなた、本気で、人魚みたいなものが実在していると信じておられるのですか」

アステリアス氏――勿論ですとも。トリトンについても同様です。

リストレス閣下――なんと。半分人間で、半分魚などというものをですか。

アステリアス氏――まさしくそのとおりです。彼らは海の〔野人〕オランウータンですよ。しかし、海には、私たち人間と何ら変わるところのない、完全な人間もいるものと私は確信しています。もっとも、低能で、鱗にはおおわれておりますが。というのも、解剖学者たちの間では当り前のことなのですが、「胎児の心臓の両心房の隔壁にあいている穴」は大人になっても開いたまま残っておりますし、しかもそこで行われる呼吸作用はと言うと、生きていくのに必要ではないのです。しかしですよ、もし私たちの身体がそうなっていないとすれば、真珠漁に従事するインドの潜水夫たちが、水中に何時間も潜っていられたり、あるいはトロニングホルムの、かの有名なスウェーデン人の庭師が、氷の下で、溺れもせずに一日半も過ごせた、などといったことが説明できましょうか。ネーレーイス〔ギリシャ神話の海の精の一人〕、もしくは、人魚が、一四〇三年、オランダの湖で捕獲されましたが、彼女は、話せないということ

を別にすれば、フランスの御婦人と何ら変わるところがなかったのです〔エダムの人魚のこと。彼女は、嵐の間、水路が壊されたため、泥の上に打ち上げられているところを発見された〕。一七世紀も終り頃、イギリス船が、陸から一五〇リーグ離れたグリーンランド海で、六、七〇隻の小型船の船隊を発見しましたが、その一つ一つに、トリトン、もしくは、海人たちが乗っていたのです。イギリスの大型船が接近すると、彼ら全員、一斉に驚いて、まるで人間の恰好をしたオウムガイの変種みたいに、船もろとも、水中に姿を消してしまいました。高名なドン・ヘヒーオ〔ベニート・ヘロミノ・ヘヒーオ・イ・モンテネグロ（一六七六―一七六四）のこと。ベネディクト会修道士で、その懐疑主義から「スペインのヴォルテール」と呼ばれた〕は、フランシス・デ・ラ・ヴェーガという名のスペイン人の若者について、信ずべき、しかも充分証明済みの話を伝えています〔ヘヒーオのフランシス・デ・ラ・ヴェーガの話（「リエルガーネスの禁止令」）の調査は、その著『劇場批評家』にあり〕。その若者は、一六七四年の六月、友人たちと海水浴をしていた折、突然、海中に潜り込んで、それっきり二度と浮んでこなかったそうです。友人たちは、彼が溺れ死んだものと考えました。友人たちは、ごく普通の人間であり、敬虔なカトリック教徒でしたが、哲学者だったとしても、きっと同じ理にかなった結論を引き出したでしょう。

ラリンクス師――論理的この上ない話ですな。

アステリアス氏――五年後には、カディス〔スペイン南西部、大西洋のカディス湾に臨む港〕付近に住む漁師たちが、トリトン、もしくは、海人が網に引っ掛かっていたのを発見しました。彼らは、その海人に、数か国語で話しかけてみたのですが……

ラリンクス師――漁師たちは、非常に学問があったわけですな。

ヒラリー氏――同業の兄弟、聖ペテロの特別の御加護により、外国語が話せたのでしょう〔五旬節に天から聖霊が下

がり、ペテロら十二人の弟子たちが外国の言葉を話したことへの言及。『使徒行伝』第二章参照〕。

リストレス閣下――聖ペテロはカディスの守護聖人なのですか？〔カディスの守護聖人は聖セルヴァンドと聖ヘルマン〕

（一同の者は誰もこの質問に答えることができず、アステリアス氏は話を続けた）

漁師たちは、数か国語で話しかけてみましたが、彼は魚同然に口をききませんでした。それで漁師たちは、彼を高徳の修道士たちに引き渡し、悪魔祓いをしてもらったのです。しかし悪魔も何も言いません。数日後、海人は、やっとリエルガーネスという村の名を口にしました。修道士の一人が、彼をその村へと連れて行きました。彼の母親と兄弟たちは、彼が誰であるか分かって抱き締めました。ですが、抱き締められても、魚同然、感動しません。身体には鱗があり、徐々に剝がれ落ちていったのですが、皮膚は、鮫皮のように固くてゴツゴツしていました。海人は、九年間、家にいたものの、話す力も理性も戻ることはなかったのです。それから、再び姿を消したのですが、昔から知り合いの一人は、数年後、アストゥーリアス〔スペインの北西部のビスケー湾に面する地方〕の海岸近くに、彼が海面からひょっこり頭を突き出すのを目にしました。こういった事実は、彼の兄弟、及びリエルガーネスの近くに住み、我らがトリトンとしばしば正餐を共にする光栄に浴した聖ヤコブの騎士、ドン・ガスパード・デゥ・ラ・リーバによって証明済みであります。プリニウスは、第二代ローマ皇帝ティベリウスに、オリシポン人の大使について言及し、とある洞窟では、トリトンがその貝殻に乗って遊んでいる、という噂を、海人族、人魚族に関する、その他いくつかの信ずべき事実と合わせて伝えています〔『博物誌』第九書第四章〕。

リストレス閣下――驚きですね。私は、社交期には海岸によく出かけますが、人魚などというものはこれまで見たことがない。（彼はベルを鳴らし、召使を呼ぶ。ほろ酔い気分のフェトゥー登場）フェトゥー、私は、これまで人魚とい

うものを見たことがあるかね。

フェトゥー――人魚ですかい。にーん魚ねえ。ああ、陽気なお魚ちゃんのことですね。勿論ですとも旦那さま。それでしたら、ございます。しかも方々で。このでぇ所にも、一人か二人おれば、と思めぇますです。ええ、本当ですとも。旦那さま。墓石みたいに憂鬱な連中ばっかですからね。

リストレス閣下――私が言っているのは人間に似た奇っ怪な魚のことだよ。フェトゥー。

フェトゥー――けったいな魚のことですかい。勿論ですよ。わかってますとも。町を出てから目にするものといったらそればっかですからねえ。ええ、本当ですとも。

リストレス閣下――お前、少し飲み過ぎているようだね。

フェトゥー――いいえ、旦那さま。ちょっぴり足りないくらいです。湿地っつうのは、体によくないですからね。瘴気を追っ払おうと、執事のレイバンさんのポンチ酒を飲んでおったんで。

リストレス閣下――フェトゥー、酔いを冷ましてこい。

フェトゥー――わかりました、旦那さま。酔いを冷まして、いとも尊いジャン大司教〔デゥ・ロランの小説『相棒マシュー』に出てくる人物で、ドンフロンの大司教のこと。この小説に関するピーコックの興味深い評価については、彼の随筆「フランス喜劇小説」を参照のこと〕みたいになってきますよ。陽気なおさかなちゃんがいたらなあ。なのに、いるのはけったいな魚の執事だけ。やっこさん、ポンチ酒の盃の中で泳いでますよ。おっと、歌を一つ思い出しました。「きれいなお嬢ちゃん、きれいなお嬢ちゃん、みんな陽気なおさかなちゃん」（歌いながら、フェトゥー、千鳥足で退場）

リストレス閣下――まったく、あきれ果てた、とはこのことだ。あのならず者めが、こんなになったのは見たことが

ない。ところで、アステリアスさん、一体、あなたはクウィ・ボウノウ〔何のために〕、人魚探索に苦労し、犠牲を払ったりなされるのですか。クウィ・ボウノウというのは、私がいつも、何の目的であれ、誰かが大いに労を取っているのを見ると、尋ねさせていただくことにしていることなんですよ。私自身、シニョール・ポコクランテ〔ヴォルテールの哲学小説『カンディード』の登場人物〕みたいな人間でして、何もしないでただ生きているより、もっと良くて愉快なことが、果たしてあるものかどうか知りたがる口でしてね。

アステリアス氏――私は、これまで、遠く離れた無人の海岸に、何度も航海をしてまいりました、リストレスさん。砂漠や荒れ果てた国も旅してまいりました。危険をものともせず、疲労に耐え、窮乏にも甘んじてまいりました。そして、こういった最中でも、何もしないでただ生きていることと、決して取り代えるわけにはいかない喜び、というものを経験したのです。私は、沢山の悪を知っていますが、それらはいずれも最悪のものではありませんでした。最大の悪というものは、思うに、倦怠（アンニュイ）としてさまざまに理解されていることでしょう。すなわち、癇癪、無念、気鬱（きうつ）、憂鬱、暇潰し、欲求不満、人間嫌い。それから、社交界だけでなく社交界の文学にもはびこっている、絶えることのない一連の、苛立ち、愚痴、猜疑、嫉妬、恐怖といったものです。それらは、哲学や科学をもっと人間的に追求することで、人間性の本性に宿る更に優れた感情や、更に価値のあるエネルギーを生々と保たないなら、我々の精神の海を、冷たい海に変えてしまうことでしょう。

リストレス閣下――現代の社交界の純文学に厳しくあたって喜んでおられるわけですね。

アステリアス氏――勿論、理由がないわけではありません。丁度、気難しくて、毒づくだけの人間嫌いが、思弁的エネルギーの理想の極致であるように、海賊とか、追い剝ぎだとかの、その他おびただしい類の略奪者どもが、唯一活発なエネルギーの理想の極致であるわけですから。陰気な眉と悲劇的な声というものが、社交界のマナーの、最近の

特徴であるように思われます。道徳的及び政治的な絶望を担った、病的で、壊滅的で、致命的で、反社会的な強い熱風が、現代のパルナッソス山〔英雄パルナッソスが、ふもとにデルポイの神託所を開いたギリシャ中部の山でアポロと詩神たちの霊地。転じて詩歌その他、創造的活動の中心地〕の山々や谷間を吹き抜けているのです。一方、科学は、落ち着いた威厳をもって独自の道を進みながら、若者には、純粋かつ生々とした喜びを、成人には、静謐かつありがたい職業を、そして老人には、喜ばしきことこの上ない思い出と、心地よき有益な回想のために、尽きることのない材料を与えているのです。その信奉者は、人間づき合いの気紛れからも、人間の運命の偶然からも自由なのです。彼にとって、自然は偉大で無尽蔵の宝庫であり、人生の日々は享受するには短すぎ、倦怠（アンニュイ）などといったものとは無関係なのです。世間とも自分自身の精神とも平和で心安らかであり、自分自身に満足し、周囲の者を幸せにし、その心地よき有益な人生の最期は、美しい一日の夕暮れと同じなのです。*

リストレス閣下――まったく、私自身、是非とも、そういった人生を送りたいものです。が、それは私には荷が勝ち過ぎましょう。おまけに、私は学問は大学で卒業しました。朝はベッドにもぐり込んだまま、夜は皆さんと一緒に暇を潰す、その合い間に着替えをしたり、食事をしたりして、残りの何もすることのない手持ちぶさたのわずかな時間は、埋め草として、骨の折れない読書を少しばかりして、何とか一日を過ごすように努めているのですよ、この私は。それに、あなたが非難しておられる、現代のサロン文学の、あの憎めない欲求不満と社交嫌いというのは、思うに、非常に素晴らしい精神的強壮剤だと請け合ってもいいくらいです。それこそ、わざわざ何かしてやる価値のある人間など存在しない、ということを教えてくれるのですから、私も、無為に過ごす、という私のお気に入りを追求することに甘んじているのです。

マリオネッタ――でも、そういう書き物にも、ある種、無意識的な自己暴露というものがございませんか。何か、そ

れ自身の解毒剤のようなものを内包しているように思えますの。だって、そうでなかったら、心から、真実、世の中を憎んだり軽蔑したりしているような人間が、わざわざ、そう主張するため、三か月に一度、本を世に問うたりはしませんでしょう。

フロスキー氏――そこに問題の秘密があるわけだよ。いづれ陰鬱な文章でもって解明しようと思っとるのだが。バークレーによれば、物事の本質は、知覚ということだ。物事は、知覚されるが故に存在する。が、それはそれとして、閑話休題。物質世界に関する限り、世の物質主義者、物活論者、反物活論者たちは、この点を明らかにしようとしておるのだが、それはまさしく、

気のふれた、しかも間違った連中の
頭に起きた、微妙な問題
〔バトラー、『ヒューディブラス』第一部第二篇七〇三―四行〕

というのも、我々、超越主義者だけが正しいのですからな。つまり、幸福の本質は知覚だと、はっきり断言してもよろしいでしょう。知覚されるが故に、存在するわけです。「善悪、すべてはその人の心次第」〔『妖精女王』第六巻第九篇第三〇連〕と言うとおりです。快楽と苦痛の要素は、何処にでもあります。環境や対象が我々に与え得る幸福の度

＊原注――デニス・モンフォール著、『モリュスクの博物誌概括』、三七―八頁。訳注――アステリアス氏のスピーチの後半、及びその前のスピーチの冒頭の文は、モンフォールの三七―九頁の言い換えである。

合いというものは、実際、それらに接近する場合に我々の保持している精神的性癖によるのですよ。もし皆さんが、幸せな性癖とか欲求不満の気質とかいった、ありふれた言い草が何を意味するかを考察されるなら、私の論じていることの真理が普遍的に認められていることが、お分りのはずです。

（フロスキー氏は、突然話を中断する。知らず知らずのうちに、常識の理解を踏み越えてしまっていることに気づいたのだ）

ヒラリー氏――まったくです。幸せな性癖というものは、至る所に楽しみの材料を見い出します。都会にも田舎にも、人といる時でも孤独であっても、劇場にいても森にいても、群衆の喧騒の中にいても山中の静寂にいても、思索の材料と楽しみの要素は同じなのです。照明輝く、麗人と美人でごった返した劇場で、『ドン・ジョバンニ』の音楽に耳を傾けるのも一つの楽しみの方法ですし、日没に、湖上のボートの動き以外に静けさを乱す物音とて何一つない寂しい湖の中を、滑っていくのもまた、別の楽しみ方です。幸せな性癖の持ち主は、双方から楽しみを引き出しますし、何事にも満足しない気質の輩は、いずれからも得るところはなく、いつも粗探しばかり、比較ばかりして不満を増大することに忙しくしています。人生という路傍に、一方は、すべての花を摘み集め、他方は、いら草をかき集めているのです。一方は、何でも楽しむ能力を、他方は、何も楽しめない能力を持ち合わせているわけです。一方は、存在する良いもの一切に楽しみを実感し、他方は、何かもっと良いものに焦がれるあまり、目の前に在るものを苦痛に変えるのです。しかし、もっと良い、と思うのも、ただ存在しないからにすぎないわけで、たとえ存在しても、それとて、とても享受できないにもかかわらずです。人生における、そういった病的な精神の持ち主は、文学においては、批評家を本業とする者と言えるでしょう。連中は、欠点しか見ません。何故なら、初めから美に対して目を閉じることにしているからです。批評家は、天才を芽のうちに枯らすべく全力を注ぎ、それをものともせずに育ってくる者も認め

ようとはしないで、それでいて、文学の衰亡に不平をこぼすのです。同じように、こういった社会の潰瘍は人間性や社会について不平をこぼします。そこにあるすべての善から、故意に自分自身を遠ざけ、自分自身と周りのものすべての幸福をも枯らすべく全力を注いでいるにもかかわらずです。ですから、人間嫌いは、時には頓挫した慈善心の結果でありますが、それよりも、自分が価値ほどに評価されていない、と言って世間と争う、うぬぼれた、屈辱に満ちた、虚栄心の所産であることの方が多いのです。

スカイスロップ――（マリオネッタに向かって）氏の意見は、かなり手厳しいね。人間性にはいいところが沢山あるけど、今のところは、調子が悪いんだよ。熱烈な精神は、あるがままの現状に不満を抱かざるをえないし、それで改善の可能性に関する自分たちの見解に従って、希望か絶望のいずれかの両極端に走ってしまうんだ。そのうち、前者が情熱で、後者は人間嫌いってことなんだけど、その源はと言えば、この場合同じなんだよ。ちょうどセヴァーン川〔ウェールズ中部から北東に流れ、イングランド西部を南流してブリストル湾に注ぐ〕とワイ川〔ウェールズ東部・イングランド西部を南東に流れセヴァーン川の河口部に注ぐ〕が、両方ともプリンリモンに発しながら、別々の方向に流れていくようなものさ。

マリオネッタ――「それから、どっちの川にも鮭がいる」〔『ヘンリー五世』第四幕第七場第三三行〕。だって、両者の類似はマケドニア〔バルカン半島南部、今のギリシャ、ブルガリア、ユーゴスラヴィアにまたがって、前四世紀、特にフィリップ二世とその子アレキサンダー大王の時に最盛期を迎えた古代の王国〕とモンマス〔ウェールズのグウェント州の町でヘンリー五世の生地〕のそれと同じですもの。

第八章

マリオネッタは、翌日、スカイスロップのひどい動揺に気づいたが、その原因らしきものを何一つ想像できなかった。最初は、ほんの些細な一過性のことが原因で、二、三日すれば、じきに収まると、高を括ろうとしたのだが、その予想に反し、動揺ぶりは日毎にひどくなっていく。スカイスロップは神秘がまさしく神秘的だということで、神秘を愛する傾向が強く、つまり、ある目的のために神秘を手段として用いるけれど、まず神秘が通用する範囲内で目的を選ぶ、ということを彼女は充分に承知していた。が、今では、彼は、その神秘体系の法則が許すよりも、もっと多くの神秘を相手にして、その闇の外套をひどく着心地悪そうに、纏っているように見えた。彼女の持てるわずかながらの戯れの技巧のすべても、苛立させるにも、宥めすかすにも、徐々にその力を失ってしまった。そして自分の影響力の減退に気づいたとたん、すぐさま気がめいり、その結果、その物悲しい振る舞いのため、彼女はグロウリー氏にとってすこぶる興味深いものになった。そのグロウリー氏、息子を結婚させようとしていたツーバッド嬢との一件で、自分の願望が（この願望、その若き御婦人の夢魔御殿での不在の割合が日毎に増大するにつれ、その可能性はますます薄くなっていったのだが）成就しそうもないことを充分に考慮したうえで、マリオネッタを自分の娘にするという考えも悪くはないな、と思うようになっていた。

マリオネッタは、スカイスロップからその神秘の真意を引き出そうと、さんざん試してみたのだが、当の本人からは一向に引き出せそうにない、と絶望し、フロスキー氏からなら、何かその手掛かりが見い出せるやもしれない、と希望を抱くようになっていた。フロスキー氏は、スカイスロップの第一の親友で、その寂しき塔に、誰にもまして頻繁に迎え入れられた人物だったからである。しかしながらフロスキー氏、午前中に姿を現わすことは絶えてない。陰

鬱なバラッド創作に取り組んでいたからである。そこでマリオネッタ、不安に駆らるるあまり、遠慮会釈もかなぐり捨て、氏が書斎としている部屋に押しかけていくことにした。ドアをノックする。「おはいりなさい」という声に、部屋に入っていく。時は正午、フロスキー氏にとって、迷惑至極なことに、太陽の輝きは最高頂に達していた。御当人は、シャッターを下ろし、窓のカーテンを引いて、その具合の悪さをうまく回避していた。片手にペン、もう片方の手に薬味入れを持って、たった一本の蠟燭に照らされたテーブルの前に座っていた。その手にした薬味入れで、時折、蠟燭の芯に塩を振りかけ、青白い光を灯らせている〔かつて、明かりが青く燃えると幽霊が出ると考えられていた。「灯火の青いのは、何か悪霊のいる証拠」『リチャード三世』第五幕第三場第一八〇行等を参照〕。彼は「その目を恍惚たる霊感のうちに見開き」〔『真夏の夜の夢』第五幕第一場第一二行〕て座り、その霊感を宿したまなざしを、マリオネッタに向ける。まるで彼女が魔法使いの呪術で呼び出された乙女の幽霊ででもあるかのように。それから、はっきりと苦悩の表情を浮かべ、前方に手をかざし――首を振り――手を引っ込め――目覚めたばかりのように両目をこすり――預言者エレミアさながらの、哀愁に満ちた悲壮な口調で言った。「この予期せぬ御来訪、如何に解したものでしょうか、オーキャロルさん」

マリオネッタ――お邪魔して申し訳ございません、フロスキーさま。でも、私が――あなたが――従兄弟のスカイスロップさまのことに御関心がおありなら――

フロスキー氏――失礼ですが、オーキャロルさん。私は地上の如何なる人間、如何なる物にも、関心なんぞありません。そういう感情は、よくよく分析してみれば、この上なくお上品な博愛主義の真髄ということになるでしょうな。

マリオネッタ――勿論、そのとおりだと思いますわ、フロスキーさま。難解な形而上学のことはよく存じあげませんが、でも――

フロスキー氏――難解ですと。オーキャロルさん。あなたが読者大衆の卑俗な迷蒙に陥っておられるとは遺憾ですな。彼らにとって、対照誇張的観念の配置を含む、見慣れない語配置というものは、直ちに、超越的極端詭弁の逆説学、というものを暗示するわけですな。〔コールリッジ曰く、自分の意見が逆説的だと称されることほど「我慢のならないものはない」『友人』（一八三七）第三巻三三六頁〕

マリオネッタ――本当言って、フロスキーさま。そのような考え、私には毛頭、思い浮かびませんわ。こちらにお伺いしましたのは、教えていただきたいことがあったからでございますの。

フロスキー氏――（首を振り振り）これまで、そのような目的でこちらにおいでになった方など、どなたもございません。

マリオネッタ――思いますに、フロスキーさん――つまり、信じますに――つまり、空想しますに――つまり、想像しますに――

フロスキー氏――The *τουτεστι*〔その「つまるところ」〕、the *id est*〔その「いわば」〕、the *cioè*〔その「いわゆる」〕、the *c'est à dire*〔その「すなわち」〕、the *that is*〔その「つまり」〕と言いますのは、オーキャロルさん、こう申しあげる無躾をお許しいただけますならば――この場合には適用できませんよ。「思う」と「信じる」とは同義語ではありません――なんとなれば、「信じる」とは、きわめて多くの重大な事例において、思考のまったくの欠如、絶対的な否定から生じるものだからです。それ故、精神の健全にして正統なる状態に他なりません。そして「思考」と「信念」とは、共に「空想」とは、本質的に異なるものです。そして「空想」もまた「想像」とは別物であります。この「空想」と「想像」との違いは、形而上学の最も深遠にして重要なる要点なのです。私は、それを解明するために七〇〇頁にもわたる約束をしたのですが、この約束、銀行が支払いの約束を遵守するのと同様、忠実に遵守してみせますぞ。

〔コールリッジのこのような約束に関しては、例えば、「文学的自伝」第一三章を参照〕

マリオネッタ――誓って申しあげますが、フロスキーさま。私は銀行は勿論、形而上学にも関心はございませんわ。それに、もう少し、あなたがいばらないで馬鹿な娘にもわかる言葉で話してくださるのでしたら――

フロスキー氏――いばる、などとおっしゃらないでください。あなたが話しておられるのは、この世で最も謙虚な男だということを御存知ないのですか。とりもなおさず高潔の甲冑で身を固め、謙譲の衣を身に纏った男なのですから。

マリオネッタ――従兄弟のスカイスロップさまは、最近、神秘の雰囲気を身につけておられます。それで、気が気でないのです。

フロスキー氏――それは意外ですな。神秘の雰囲気ほど、人に似つかわしいものはございませんぞ。神秘こそ、まさに詩歌に存在する一切の美しさ、信仰に存在する一切の神聖さ、超越的心理学に存在する一切の深遠さの、かなめ石なのですぞ。目下、私は全篇を通じて神秘に他ならぬバラッドを書いております。それは「夢を作りあげる材料」〔『あらし』第四幕第一場第一五六―七行〕のようなものです。実際、夢からできあがったものなのです。何となれば、昨夜、私はいつものように、本を読みながら眠りについたのです。すると純粋理性の幻の夢をみました。眠っている間に、私は五百行も書きあげたのです。〔コールリッジの『クブラ・カーン』の序文に寄せた、その詩の作成に関する説明への言及〕その結果、バラッドの夢を見たという点で、私は今や自分自身のピーター・クインス〔『真夏の夜の夢』に出てくる大工で、ボトム等アテネの職人たちの演ずる劇中劇『いとも悲しい喜劇、ピラマスとシスビのいとも残酷な最期』の作者兼演出家〕の資格を務め、自分の夢からバラッドをものにしておるのです。この詩は「ボトムの夢」と呼ばれるでしょうな。「ボトム〔実体〕がないのですからね」〔『真夏の夜の夢』第四幕第一場第二一九―二〇行〕。

マリオネッタ――分かりました、フロスキーさん、私のお邪魔した、お時間が悪かったということですね。それで私

に、わけのわからぬたわごとをお話なさって罰しようとなさっていらっしゃるのですわ。（フロスキー氏は「わけのわからぬたわごと」という言葉にぎくっとして、危うくテーブルをひっくり返しそうになる）誓って申しますけれども、あなたにお伺いしたかった問題に、これほど深い関心を持っておりませんでしたら、このようにお邪魔することもなかったでしょうに――（フロスキー氏はむっつりしながらも威厳をもって聞いている）――従兄弟のスカイスロップさまは、お心を蝕むような秘密を抱えておられるようですの――（フロスキー氏は無言のまま）――とても不幸に見えますわ。――フロスキーさま――恐らく、あなたは原因を御存知なのでしょう――（フロスキー氏は相変わらず無言のまま）――ただ、知りたいだけなのです――フロスキーさま――もしそれが、何か――何かして解決できるものなのかどうか――どなたかが――私が多少なりとも存じ上げております方が――果たして、解決できるものかどうか。

フロスキー氏――（ちょっと間を置き）秘密を明らかにするには、色々とあります。哲学小説で理論的にも実際的にも薦められているような。最も良いと考えられている方法は、鍵穴から盗み聞きしたり、簞笥や机の錠をこじ開けたり、手紙類を盗み読んだり、封じ糊に蒸気をあてたり、封蠟の下に熱くした針金を差し込んだりすることなどですな。いずれも実行すると法に触れると存じますが。

マリオネッタ――フロスキーさま。私のことを、そんな卑しい、見さげはてた技巧を弄したり、奨励したりする人間だと、勘繰る必要などございませんわ。

フロスキー氏――にもかかわらず、そうした方法は、真面目で著名な作家たちによって薦められているのですよ。しかも、もっともな理由をもってですぞ。人物を研究し、また人間理解を目指す、あのあっぱれな好奇心を満足させるのに、簡単かつ容易な方法としてね。

マリオネッタ――私は、あなたさまが良いと思われないような、そんな道義も存じあげておりませんし、また良いと思われていらっしゃる、形而上学のことも存じあげません。ただ、お助けいただいて、従兄弟がどうしたのか知りたいだけなのです。あの方が不幸せそうなのは見たくありませんわ。それには何か理由があるはずですから。

フロスキー氏――私には、むしろ何の理由もないと思われますな。不幸でいることが流行なのですよ。理由があって不幸だなんてことは、あまりにも陳腐です。何の理由もなくそうなら天才の域に達していますな。非惨至上主義のために悲惨になる術は、今日では、完成の極みに達していますぞ。古のオデュッセウス〔トロイ戦争におけるギリシャ側の大将でローマ名はユリシーズ〕も現実の不幸に耐え忍ぶ輝かしい実例を、ふんだんに披露してくれましたが、現代のオデュッセウスには取って代わられるでしょうな。彼は、想像上の悪を前にして、不平たらたら、すぐに音をあげてしまう、という一層教訓的な手本を示しているのですから。

マリオネッタ――申し訳ございませんが、フロスキーさま。わかりきった問いには、わかりきったお答えをしていただけませんか。

フロスキー氏――それは不可能ですよ。我がいとしのオーキャロルさん。我が生涯において、わかりきった答えをする問いなど一つもないのですから。

マリオネッタ――私の従兄弟がどうしたのかを、御存知なのですか、それとも御存知ないのですか。

フロスキー氏――私が知らないという言うことは、換言すれば、何か知らないことがあると言うことになります。滅相もありません。万事に純粋先取的認識を備え、また頭の中には、ユークリッドを一度も読まずして、幾何学の一切の何たるかを宿している超越的形而上学者〔ウィリアム・ドラモンドがカント学徒を言及して言った軽口からの借用。ドラモンドの『学究的疑問』（一八〇五）三五八頁参照〕が、自分が何か知らないことがある、と明言するなどと

いった経験的誤謬に陥いることなど断じてありません。私が知っていると言うことは、事実の現前する問題に関して、実証的かつ付随的な知識を有していると自負することになるでしょう。そうした問題は、その証拠の性質、また同じものを照らし出すさまざまな光――

マリオネッタ――わかりましたわフロスキーさま。あなたは何も知らないか、知っていても教えてくださる気がないかのどちらかということですわ。無用にお手数をおかけして申し訳ございませんでした。

フロスキー氏――我がいとしのオーキャロルさん。あなたを喜ばせるようなことを申しあげることができましたら、大いによろしかったのでしょうな。しかしどんな人間であれ、どんな問題にせよ、このファーディナンド・フロスキーから、何らかの情報を引き出したと言われては、それこそ超越的哲学者としての私の評判は、永遠に、地に落ちてしまいますからな。

第九章

スカイスロップは、日毎に、無口に、謎めいて、上の空になっていった。また、塔に閉じ籠っている時間も日毎に、徐々に長くなっていく。マリオネッタは、彼の激しい愛情が冷めていく徴候の明らかなのを、見て取ったように感じた。

午前中、彼と二人きりでいることは滅多になかったし、そういう場合にも、彼の方から口を利いてくれるものと期待して黙っていると、一言たりとも話そうとしない。彼女がそれとなく話すと、「ああ」とか「うん」とか、素っ気なくうなずくだけ。たとえ何か尋ねても、その答えは、短い、気詰まりな、捕らえどころのないものだった。とは言っ

ても、意気消沈はしたものの、彼女の持ち前のふざけ気分がすっかりなくなってしまうわけでもなく、時折ふと、夢魔御殿の陰気な雰囲気に光彩を添える。またいつであろうと、スカイスロップの内に、未だ消えやらぬ、あるいは蘇った愛情の徴候を見てとるや、恋人をいじめてやりたいという思いが勝って、すぐさま、彼に対する悲しみや同情心もなくなってしまった。もっとも、相手を知りたいという好奇心まで消えることはなかったが。どうやら、スカイスロップの方は、それを満足させてなるものかと、固く心に決めているようだった。しかしながら、このふざけ気分、大部分はこしらえもので、怒りっぽいストレフォン〔サー・フィリップ・シドニーの『アルカディア』中の、恋人を失って嘆く羊飼い。転じて恋に悩む男の意〕を前にすると、大抵、消えてなくなり、彼にしてみれば、ただただ迷惑なだけだった。土地の守護霊、夢魔御殿の地霊、すなわち黒胆汁の憂鬱の霊は、彼女の蒼白くなる顔色を承認し始めた。そんな変化に気づいたスカイスロップ、優しい同情心が呼び起こされるのを感じ、それで、僕が、一見、無愛想に見えるのも、人間社会の再生という将来有望な計画について深く瞑想しているからに他ならないから、と彼女を安心させ、この悩める乙女を慰めるのに全力を尽くす。一方、マリオネッタは、恩知らず、情け知らず、冷血漢、とののしり、おまけに、ふんだんにすすり泣きや涙を添える。哀れなスカイスロップは、刻一刻と軟化し、言うなりになった挙句、終には彼女の足元に身を投げ出し、たとえ競争相手がどんなに眩しい美人であろうと、どんなに卓越した天才であろうと、どんなに洗練された才女であろうと、またどんなに啓かれた哲学精神の持ち主であろうと、僕の神々しいマリオネッタをあきらめることはできない、とまで言い切った。「競争相手ですって！」とマリオネッタは内心考える。そして、突然、寒気のするような無愛想な様子を帯びて言う。「あなたは完全に自由なのですよ。どうぞお好きなようになさって。私のことなど気になさらずに、どうかあなた御自身の計画をお続けなさってくださいな」

スカイスロップは面喰らった。彼女の、あの激しい情熱や涙は、一体、どうなってしまったんだ。相変わらず跪い

たまま、哀れに、おずおずと彼女の手にくちづけし、哀切この上ない調子で言う。「僕のことを愛してないのかい、マリオネッタ」

「ええ」マリオネッタは、素っ気なく、平然とした顔色をして言う。「そうよ」スカイスロップは、信じられない、という体で、まだ見上げている。「ええ、と言っているのよ」

「ああ、左様でございますか」スカイスロップは立ち上がりながら言う。「なるほどそういうことなら、世の中にはいくらだって——」

「確かに、いくらだっていますわ。私に、あなたの企みが見抜けないとでも思ってらっしゃいますの。情知らずの人でなし」

「僕の企みだって！　マリオネッタ」

「そうよ。企みよ、スカイスロップ。あなたは、私を見捨てるためにここにいらしたんだわ。しかも狡猾に画策して、あなたのせいではなく、私のせいでそうなったと思わせるようにするためにね。そして、こういう、あさましい策略で、自分の感じやすい良心を宥めることができるものと思ってらっしゃるんだわ。でも、あなたが私にとって、それほど大切な方だなんて思わないでくださいな。そんな風に思わないでください。あなたなんて、私には、全然大切ではないのですから——全然よ。ですから、私のこと、放っといてください。私があなたを見捨てるんです。放っといてください。どうして放っといてくださらないのです」

スカイスロップは、抗弁しようと努力したが、効果はなかった。彼女は、放っといて、という命令を繰り返し、終に、彼は、その気持ちが素直なあまり、その言葉に従おうとした。彼がドアまで、あと一歩という時、マリオネッタは言った。「さようなら」スカイスロップは振り返る。「さようなら、スカイスロップ」彼女は繰り返す。「もう二度と、

お目にかかることはありませんわ」

「もう会わないだって、マリオネッタ」

「明日、ここから出て行きます。恐らく、今日にでも。この次、お目にかかる時には、私達のどちらかは結婚していることでしょう。それに、ひょっとしたら、死んでいるかもしれませんわ、スカイスロップ」

最後の言葉を言った時の、彼女の声の突然の変化、また、それを言い終えぬうちに、どっと溢れた涙は、この心やさしき若者に電気のように作用した。そして、次の瞬間には、完全な和解が、何一つ言葉を介さなくとも成立していた。

実際、ある学識豊かな決疑論者に言わせるなら、愛に言葉は不要であり、恋人たちの誤解も不和も、その一切は、言葉が通用しない問題に言葉を用いるという致命的な習慣から生まれるものであり、また、顔つき、すなわち精神的相性の合う気質を表わす人相学的表現から始まる恋は、愛情のしるしや徴候が徐々に変化する過程を経て、心から望まれる成就に至るものである。また、二つの共感しあった精神の間では、最初から最後まで、たった一言の言葉も話される必要はないし、また、恐らく、話されることもないだろう。ところが、現実は、社会の恣意的な制度が、この単純至極な過程の各々の段階で、持参金や結婚式、親や後見人、弁護士、ユダヤ人の金貸し、牧師などの形をした、込み入った沢山の妨害や障害を持ち上げる。その結果、多くの大胆な騎士たち（彼らは、ヘスペリデスの黄金の果実〔世界の西の果てにあり、英雄や善人が死後、永遠に幸せに暮らせるという島にある楽園の林檎の実のこと〕にも等しい愛を獲得するには、これら怪物たちすべてと一戦を交えて、活路を見い出さねばならない）は、のっけからあっさり撥ねつけられたり、その企てが成就するまえに打ち負かされる。しかも、そういった多くの不自然なお喋りが、この過程のあらゆる段階で、必要不可欠とされ、その結果、感じやすくも移り気な恋霊は、しばしば、不本意ながらも

奉仕をさせられて *επεα πτεροεντα* の翼〔ホメーロス『イーリアス』第一書二〇一、第二十書三三一〕、あるいは「翼をもった言葉」に乗って飛び去ってしまう。

ちょうどこの時、グロウリー氏が入って来て、二人のそばに座って言った。「事情はわかっておる。それに、我々、人間は、何をしようと、必ずや不幸になるのだから、わざわざ苦労して、お互いを更に不幸にする必要もあるまい。であるから、神とこの私の祝福をもって、さあ」――そう言いながら、彼は二人の手を取り、重ね合わせる。

スカイスロップは、こういう決定的な処置には、必ずしも心の準備ができていたとは言いきれず、もごもご口ごもるのが精一杯。「本当に、父上。どうもご親切さまです」そこで、グロウリー氏、契約を確認してもらうべく、ヒラリー氏を呼びに行く。

ところで、先程、披露したばかりの愛と言葉の理論に如何なる真理があるにせよ、確かなことは、グロウリー氏が座をはずしている間、それは半時間続いたが、一言だって、スカイスロップからもマリオネッタからも発っせられることはなかったということだ。

グロウリー氏は、ヒラリー氏と共に戻って来た。ヒラリー氏は、この父無し子の姪に生じた、これほど有利な取り決めのもたらす見込みを喜んでいた。彼なりに後見人をもって任じていたからであり、グロウリー氏の言うように、後はただ、日取りを決めさえすればよかったのだから。

マリオネッタは、顔を赤らめ、黙っていた。スカイスロップも、しばらくの間、無言の体（てい）であったが、やがて終に、ためらいがちに言った。「父上、御親切には痛みいります。ですが、実際のところ、父上は、気が早すぎるのです」

さて、この言葉、もし若い御婦人の発言なら、彼女が真実そう思ったのであれどうであれ――というのも、正直さというものは、このような場合、大切なことではないし、実際、フロスキー氏によれば、どんな場合でも大切なこと

ではないのだから――この言葉、もし若い御婦人が言ったのなら、完全に礼儀にかなったものだったであろう。しかし、若い殿方の発言となると、話はまったく別である。実際、彼の恋人の眼には、とんでもない憎むべき、許しがたい侮辱と映った。マリオネッタは怒った、激怒した。しかし、その怒りを隠し、穏便冷静に言った。「確かに、気が早すぎますわ。グロウリーさま。本当ですよ。まだ、決して心が決まったわけではございません。それに、本当のところ、私の知るかぎり、正反対に向かうでしょう。しかしこれから七年間、この問題を考えるのに、充分に時間はございますわ」仰天した一同が、返事もできぬうちに、この若き乙女は、自分の部屋に閉じ籠ってしまった。

「なんとまあ、スカイスロップ」グロウリー氏は、途方もなくさえない顔をして言った。「確かに、ツーバッドさんが言うとおり、悪魔（あくま）、我等（われら）のもとに下（くだ）りたればなりだ。お前とマリオネッタとは合意に達しているものとばかり思っていたぞ」

「そのとおり、と信じています。父上」スカイスロップはふさぎこんで言ってのけ、彼の塔にゆっくりと大股で歩き去ってしまった。

「グロウリーさん」とヒラリー氏。「私には、どう解していいものやら、理解に苦しみますなあ」

「気まぐれですよ、ヒラリーさん」グロウリー氏。「たわいない痴話喧嘩ですな。それだけのことです。気まぐれ、むら気、降ったり止んだりの四月のにわか雨。明日にはけろっと、二人とも晴れあがっていますよ」

「そうでないなら」とヒラリー氏。「このにわか雨、我々は、まんまとはまって、四月馬鹿になったことになりますなあ」

「ああ！」グロウリー氏。「あなたは、お幸せな人ですなあ。どんな悩みの中にあっても、冗談を言って自分を慰められるんですからな。どんなに事態が悪くても、冗談を飛ばせる限りは、大したことはないんですな。もし満足いた

だけるなら、私も一緒に笑えればいいのですが。しかし、実際のところ、現在、実に悲しい気持ちで、筋肉にそれだけの負担をかけるのもかなわんのですよ」

（以下次号掲載予定）

［訳者付記］

翻訳にあたって音楽に関するいくつかの不明な点につき、本学助教授粟倉宏子氏の御教示を得ました。また、イタリア語については金城学院大学の島村馨教授、スペイン語については同大学の五十嵐美智教授、フランス語については本学教授伊藤進氏、古典語については京都大学文学部哲学研究科基督教学専攻博士課程久山道彦氏にお世話になりました。この場を借りて感謝いたします。

なお、十月より中京大学の小田原謡子氏が参加し、今回掲載分の原文との照合および次回掲載分の一部翻訳に加わることになった。

＊　＊　＊

ピーコックの会参加にあたり、これまで訳された部分を一読者として読ませていただき、昨年の留学地フェンズの風景、ならびに足をのばした各地のアビーのことなどが思い出された。フェンズ、アビー共に、一目見ればこれとわかるものの、文字だけからでは誤解を生じかねないので、この二点についてここで補足しておくことも無駄ではないかもしれない。

the Fensとは「イングランド東部、ケンブリッジシャー、リンカンシャー地方の沼沢地帯」と辞書にあるが、「沼沢」という言葉から受けるイメージとは、やや異なっている。雨が降り続いたりして川が溢れた場合など、水びたしになる低湿地であり、地盤もゆるいため、大風で大木が倒れたりする被害も被るが、ふだんは、牛が草を食み、木陰で昼寝をするような草地である。

Nightmare Abbey「夢魔御殿」という名称は、この館が、昔、修道院であったことをあらわしていると言えよう。イギリスの館は、所有者が変わったからといって、ただちにその名称までも変わるというわけではなく、名称はその館の歴史をものがたる。たとえばバイロンの館であったニューステッド・アビーを例にとってみれば、これはもともと一一七〇年頃創立されたニューステッド・聖母マリア・プライオリーが、ヘンリー八世によって一五三九年に解体され、一五四〇年、その所領および隣接のパプル

ウィク荘園とともにコルウィックのサー・ジョン・バイロンに八一〇ポンドで下げ渡され、ニューステッド・アビーという名で知られるバイロン家の館となったものである。一七九八年、当主の急死で、当時一〇才であった、後の詩人バイロンが第六代男爵となり館を相続するが、彼は借財のため一八一七年にこれを手放し、学友トーマス・ワイルドマンが買い受け、修復した。彼の死後、館は一八六〇年にウィリアム・フレデリック・ウェッブのものとなり、彼の子孫の手を経て、ノッチンガムの実業家サー・ジュリアン・カーンに買いとられ、一九三一年、ノッチンガム市に寄贈され、今日一般公開されている。西の正面は十三世紀プライオリーの往時をしのばせるが、館には歴代住人の手が加えられている（小田原謡子）。

＊　＊　＊

『夢魔御殿』は左記のように配分掲載されています。

第一章―第三章、作家について、作品について……『中京大学教養論叢』第三十巻第二号。
第四章―第九章……『中京大学教養論叢』第三十巻第三号。
第十章―第十五章……『中京大学教養論叢』第三十巻第四号（近刊）。